

もつたいない

福井県立金津高等学校 三年 鷺田 早紀

「今年も、夏野菜もうだめやなあ。」

と、畑から帰宅した祖母は、日焼けして色が変わった茄子と、大きく成り損なつた胡瓜を台所の片隅に置いた。例年なら、十月一杯はある茄子が、八月一杯で終わろうとしている。葉の多くは虫に食われ、惨めな姿を晒すだけとなった、野菜達。哀れとしか言えなかった。

家に隣接するようにある畑。私の部屋の窓からは、野菜の成長を確かめることが出来るはずだ。しかし、私は興味がなかった。いや、それどころか、祖母の作っ

た野菜を拒否し、口にすることさえなかったのだ。肥やしをやり、消毒を散布する時の臭い、私にとって、相対する敵でしかなかった。

今年の夏。祖母は、毎年のことであろう、畑の水やりをしていた。一輪車の上に、バケツを何個も載せ、その中の水を、柄杓で、少しずつまいていたのだ。いくら隣接されているとはいえ、畑は、舗装されているわけでもなく、運ぶ途中で、バケツの水は少なからず、こぼれていった。それでも、家から畑まで、何度も往復する祖母。いったい何をやっているんだと、興味本位で眺めていた私は、バケツの水が、昨晚のお風呂の残り湯であること、バケツだけでは途中でこぼれ、たどりつけずに終わってしまうものが、一輪車で運ぶことによつて、そこにも溜められていくことを知った。一石二鳥と言つてしまえば、そこで終わってしまうのだが、祖母の「もつたない精神」を、改めて垣間見た気がした。

普段から「もつたない」を連呼する祖母。書きさしのノートや好き嫌いで残した残飯、使い捨ての品々等。同じおかずが毎食並んでも、なくなるまで食する祖母は、我家の残飯掃除係と呼んでいるほどだ。食のありがたさ、作った人の苦勞に感謝し、手をあわせつつ食する姿は、多分、何処の家でも、昔から続いていることだと思う。しかし、今、核家族が増え、多忙な日々の中で、一家団欒と呼

ばれる時間も、あまり見受けられない光景に、なってきたのではないだろうか。一人での食事。儀式のように、ただ手をあわせ「いただきます」を、唱える子供達。確実に増え続けてきている。祖母達から受け継がれていく姿、精神。見過ごしてきてしまった。

我が家では「エコ」を合言葉に、いろいろな取り組みをしている。

まず、電気。消費電力もばかにならないと、主電源を消すことはもとより、時々しか使用しない部屋は、ブレーカーごと切っている。エアコンは、皆が集まる茶の間のみ、使用することになっているが、それでも今年は、一度も解禁となることはなかった。

次に水。茶碗や鍋は、一度ためた水の中で確実に洗い、流水は、洗い流すのみ使用する。洗濯は、お風呂の残り湯を使用し、なるべくまとめ洗う。極めつけは、シャワーの使用禁止。シャワーだと、洗っている間、どうしても流水してしまい、節水とはいかないからだ。たわいもないことだが、継続することにより「エコ」が、確実に我が家で浸透している。

「もったいない」は、自然環境を守る基盤となっている。昔の生活は、自然と共に歩んできたものだった。人工の物がなく、不便な生活を強いらされたかもし

れないが、人や自然に、大いに恵みを与えてくれたはずだ。

今年も、各地で多くの被害をもたらす程、異常気象となっている。自然が破壊された結果、起きている現象だ。だからこそ、青い地球から見れば、ミクロの存在でしかない私だが、守るべきものは、必ず守り抜きたいと思う。今の私には、大海を、波だたせることは不可能だ。しかし、きつかけをもたらす風にはなれるはずだ。出来ることから少しずつ。「もつたいない」を合言葉に、風を切って歩いて行こう。